

ナグ = エル = デイル出土の死者への書簡

川部 恵美 *

Two Letters to the Dead from Nag^c El-Deir

Megumi KAWABE*

[Abstract]

Ancient Egyptians believed that the deceased could have some kind of influence over the living, and the evil-deed of a dead person caused matter that baffled them such as: misfortunes, diseases, arguments over property, and poverties. The living sent messages to their dead relatives through papyri, steles, linens, jar-stands and bowls of offering at the graves or tombes in necropolis in order to avert this kind of misfortune. Those messages/ letters were called by present-day Egyptologists "Letter to the Dead." Here, I re-examined two letters of papyrus: Nag^c el-Deir N3500, and Nag^c el-Deir 3737. I analyzed the letters from philological and elucidatory aspects to determine what the letters meant from the viewpoint of the living.

As a result, I believe that the writer of the first letter Nag^c el-Deir N3500 wrote that in order to stop the misfortune from one dead person, he needed to add the name of a second dead person stronger than the one who was already causing him the misfortune. In the second letter Nag^c el-Deir 3737, the writer Heni thought that a living, Seni, was his culprit, so he wrote to a dead person to stop Seni's evil-deeds. The living thought that the dead could be malicious or beneficial as the living were.

序論

古代エジプトの人々は、死んだ後も生きている時と同様の状態で生きることができると考えており、彼らにとって「死」は、終わりを意味するのではなかった。この考え方は、古代エジプト人の宗教に多大な影響をもたらした。彼らは死後、イアルの野と呼ばれる死後の世界で人生を送ると考えており¹、このことは「死者の書」にも記述されている。死者が死後の世界から現世に行き来するほかに、死者が生者に対して影響を及ぼすこともできると考えており、彼らは自分に降りかかった災難（病気や財産争い、貧困といったもの）を死者の悪事が引き起こしたとと考えていた。この悪事を与える死者は生者の身内や知り合い、果ては死者全般を指している。生者は自分、または家の者に降りかかった災難に対抗するため、自身の亡くなった親類（両親や配偶者）に対して、パピルスやステラ、リネン、水差し、供物入れのボウルに請願を書き、墓所に置いて災難を取り除こうとしていた。死者への書簡はヒエラティックで書かれており、王族以外の階級のものによって使用されていた書簡である。書簡は第6王朝から第21王朝まで幅広く存

* 関西大学文化財保存修復研究拠点 (RA) (Kansai University, Institute for Conservation and Restoration of Cultural Properties)

1 イアン・ショー、ポール・ニコルソン、内田杉彦訳、『大英博物館古代エジプト百科事典』、原書房、1997年、296～297頁。

在しているものの、第 18 王朝からは神託が行われるようになったため、死者への書簡の数は減少したと考えられている。

古代エジプトの死者に関する資料として、古王国では「ピラミッド・テキスト」、中王国では「コフィン・テキスト」、新王国では「死者の書」といったものがあり、これらは来世の復活を望むための儀式など様々な呪文からなるものの、ある程度形式化され、それに対して死者への書簡は内容に特に形式はなく、現世での災難等の実際的な問題を扱っており、当時のエジプトの人々が死者に対してどのように捉えていたのかを知ることができる数少ない資料である。これらのうち、7 通の書簡が 1928 年、ガーディナー (A. H. Gardiner) 氏とゼーテ (K. Sethe) 氏によって初めて「死者への書簡」として体系的にまとめられ、出版された。

死者への書簡は言語解釈の難しさから、主に言語学的見地から研究されていたため、書簡の内容は詳細に考察されておらず、死者への書簡の明確な位置づけがいまだに曖昧である。そこで著者は本稿で、言語解釈を再整理、再検討し、加えてこの死者への手紙の内容を考察し、死者への書簡の特色をより明瞭にしていきたい。

本稿では、死者への書簡のうち、ナグ＝エル＝デイル出土の書簡であるパピルス・ナグ＝エル＝デイル N3500 とパピルス・ナグ＝エル＝デイル N3737 (メルの墓出土の死者への書簡) の二つの書簡を扱う。死者への書簡は年代も出土地もバラバラであり、ほぼ同時期で同じ町から発見された書簡はこの二つのみである。

第 1 章 パピルス・ナグ＝エル＝デイル N3500

この書簡は、チェニの共同墓地からの出土である。現在はボストンのファインアーツ博物館に所蔵されている。年代は第 6 王朝から第 10 王朝の間と推定されている。材質は縦 25.5 センチ横 15.5 センチのパピルスに書かれている。1 行目は横向きで書かれており、2 行目から 6 行目までが縦向きで書かれている (Fig.1, 2)²。

転字

- (1) *sš n Htp-Nb(i) Tty-Snb*
- (2) *in rr(i) iw m33 .n.k nn n iww(t) iw.tn ʕ3 sk ikr.k i(w).s*
- (3) *n.k ʕ3 ʕby hrdw.k ndr w hm*
- (4) *mt/mtt pn/tn imi m33 sny sp.f wʕ dr-ntt n wnt wn*
- (5) *k3 hrw r tny ʕ3*

翻訳

- (1) ヘテブネブ (イ) とテティセネブに対する書簡
- (2) 本当にあなたはこれらの嘆いている事を見ているのですか。あなたたちはそっちにいるのです。今や、あなたは優れているのです。それは
- (3) あなたののためにそこにあるのです。子どもたちを治してください。あなたが確かにそこで

2 W.K.Simpson, "A Late Old Kingdom Letter to the Dead from Naga el-Deir N 3500," *Journal of Egyptian Archaeology* (以下 *JEA* と略す) 56, 1970, p.58.

- (4) この死んだ男とこの死んだ女を捕まえますように。彼ら二人がただ一つの悪事を見ないようにしてください。そうすれば、
- (5) この世であなたたち二人に対して大声で叫ぶ者はいません。

言語解釈

(1) *sš n Htp-Nb(i) Tty-Snb*

この行では、*sš n* は縦向きで書かれ、*Htp-Nb(i) Tty-Snb* は横向きで書かれている (Fig. 1 を参照)。*sš* という文字が示すように、書簡であるということを明確に示している言葉である。この文字は後ろの二人の人物にかかっている。

Htp-Nb(i) の最後の文字が大きく欠落しているため、二人に宛てて書いた書簡なのかは明らかにはなっていない。シンプソン氏はこの二人の人物を共同の受信人として捉えている³。ゲーディッケ氏は、「ヘテプネブ (イ) の息子ペピセネブへの手紙」と読み、書簡が一人の人物に宛てたものであるとしている⁴。ゲーディッケ氏が提案するように、*sš* 「息子」の文字が省略されていると考えるならば、前者の人物が息子で後者の人物が父親になる。また、第 12 王朝における親子関係の表現では、ゲーディッケ氏が唱える読み方ができるが、その時は、本人以外には決定詞はつかないことが多いとされている⁵。この書簡では、決定詞であると思われる部分が欠落しているために明確には言うことはできないが、欠落部分の下部分に後者の名前前の決定詞と似ている形が書かれていたのではないかと思わせる断片がある。この欠落部分が下と同じ決定詞を取ると考えるなら、ゲーディッケ氏が述べる考えは当てはまらない。*sš n* の文字と人物の決定詞から、著者はシンプソン氏が述べたように、二人の人物に対して宛てた手紙であるとする。

Tty-Snb の文字に関して、ゲーディッケ氏は *Ppi-Snb* と読むべきであると述べている⁶ が、メラー (G. Möller) 氏の *Hieratische Paläographie* から、*p* のヒエラティックの文字と全く類似していない。また Fig.5 から、右のヒエラティック *p* の文字とは完全に異なっており、中央のヒエラティック *t* の文字に近い。故に、この文字は *t* と読むべきであり、著者はこの人物の名前を *Tty-Snb* と読む。

(2) *in rr(i) iw m33 .n.k nn n iww(t) iw.tn ʿ3 sk ikr.k i(w).s*

iwwt に関して、原形は *iw* で「悲しむ、嘆く」と訳される。シンプソンは欠落部分に *t* が入ると示している⁷ が、ゲーディッケ氏は、*t* は必要がないと述べている⁸。*ʿ3* に関して、「ここに、あちらに」と訳される。この書簡での *ʿ3* の意味は、「現世」と「来世」の意味をもっている。ここでは、接尾代名詞が *tn* 「あなたたち」であることと次の文「今や、あなたは優れているのです」という文脈から「ここ」ではなく「あちら」でとるべきであると考えられる。

i(w).s に関して、他の書簡にもこの形で現れる。読みは *iw.s* と読む。接尾代名詞 *s* は *ikr* を指していると考えられる。

(3) *n.k ʿ3 by hrdw.k ndr w hm*

3 W. K. Simpson, "A Late Old Kingdom Letter to the Dead from Naga el-Deir N 3500," *JEA* 56, 1970, p.59

4 H. Goedicke, "The Letter to the Dead, Nag'ed-Deir N 3500," *JEA* 58, 1972, p.95

5 吹田浩、『中期エジプト語基礎文典』、三省堂、2003年、155頁。

6 H. Goedicke, "The Letter to the Dead, Nag'ed-Deir N 3500," *JEA* 58, 1972, p.95

7 W. K. Simpson, "A Late Old Kingdom Letter to the Dead from Naga el-Deir N 3500," *JEA* 56, 1970, p.59

8 H. Goedicke, op.cit, p.96

𓆎はここでは「あの世に」という意味をもって訳す。

𓆎*by*に関して、この用語の分析は非常に難しい。𓆎*by*は𓆎*ib*の異形であり、「結ぶ」と訳される⁹。シンブソン氏はかなりの躊躇を持って転字を行い、この言葉を「気に留めよ」と訳している¹⁰。それに対して、ゲーディック氏は、古王国におけるピラミッド・テキストにおいて「世話する、治す」といった意味で𓆎*ib*の特定の慣用的な使用を挙げている¹¹。書簡の年代が古王国末期から第一中間期にあたるため、著者はゲーディック氏の主張する訳が妥当であると考える。この用語の最後の*y*は命令をあらわしている。

(4) *mt/mtt pn/tn imi m33.sny sp.fw^c dr-ntt n wnt wn*

*imi*はゲーディック氏が述べるように、否定の命令を表している。

*sny*は「この死んだ男と女」を指している。

*imi m33.sny sp.fw^c*の文法に関して、通常は代名詞が主語の場合は、否定動詞*imi*の後に接尾代名詞がつけられるが、非常に稀なケースとして、否定補語の後ろに接尾代名詞をつけることもある。これについては、ゲーディナーの*Egyptian Grammar* § 343を参照¹²。

(5) *k3 hrw r tny 𓆎*

*n wnt wn k3 hrw r tny 𓆎*に関して、直訳は「大声でいるものは誰もいない」である。

𓆎はこの行では「この世で」と訳す。

内容解釈

書き手は無記名のため不明で、読み手はヘテプネブ(イ)とテティセネブである。書き手とテティセネブ、ヘテプネブ(イ)との関係は書簡からは不明瞭であるが、読み手はおそらく書き手の身内であり、夫とその父親(または兄弟)と推測する。その他の書簡において、生者に救済を求められる死者は、救済を求める人物の夫、父親が多い。故に、この書簡は夫とその父親に宛てられている可能性が高い。この書簡は先行研究者が述べているとおり、接尾代名詞における二人称単数と二人称複数の混同によって、読み手が一人であるのか二人であるのかが不確かであることによって、我々に書簡を読み解くことに対する難しさを与えている。

書き手はヘテプネブ(イ)とテティセネブに対して自分の子どもに起こった害悪を取り除くことを請願している。害悪の詳細は明確に記されていないが、3行目の「子供たちを治してください」という記述から、子供たちが何らかの病気になったと思われる。子供たちにもたらされた病気の元凶は「この死んだ男とこの死んだ女」であることが、4行目の「この死んだ男とこの死んだ女を捕まえてください」と書いていることから理解できる。古代エジプト人は、病気にかかるのは悪意を持った死者の仕業であり¹³、彼らは生きている人々を苦しめる力を持っていると考えていた。医学文書によって処方される一般の祈りには、「おお、イシス、偉大なる魔力を持つ者よ。全ての悪い事、邪悪な事、暴力的な事から汝は私を自由にし、開放してくれる。神と女神の一撃から、死んだ男と女から、私に対する男と女の敵から……」¹⁴とあり、病気は死者からもたらされるものであるという考えが彼らにはあった。また、4行目において死

9 吹田浩、『中期エジプト語基礎文典』、三省堂、2003年、235頁。

10 W. K. Simpson, op.cit, p.60

11 H. Goedicke, op.cit, p.97

12 A. H. Gardiner, *Egyptian Grammar* (Oxford, 1957), § 343.

13 A. H. Gardiner and K. Sethe, *Egyptian Letters to the Dead* (London, 1928), p.8.

14 A. H. Gardiner and K. Sethe, *Egyptian Letters to the Dead* (London, 1928), p.12.

んだ男と女にただ一つの悪事を見せないようにすることを述べているが、この悪事がどのようなことであつたのかは明らかではない。5行目において、書き手はヘテプネブ（イ）とテティセネブが、元凶である男女の死者を捕まえて害悪を取り除くことで、彼らのことを非難する者が現世でいなくなるだろうことを記述している。古代エジプト人は、死者が来世で生命を保つためには食物や飲物が必要であり、もし身内の者が墓前に供物を怠れば、人間を構成する要素の一つである「カ」は飢餓に襲われることになると考えていた。この行では、ヘテプネブ（イ）とテティセネブが書き手の請願を聞き入れてくれるのなら、身内の誰もが二人に対して悪い思いを抱くことないため、供物を怠ることはないことを遠まわしに述べているのではないかと考える。二人称単数と二人称複数が混同されて書かれていることについて、書き手は今まで自分たちを見守ることをしてこなかったとされる読み手の行動に対しての言葉を表現するときは二人称単数で書いており、一般的な言葉を表現するときや悪事を行っているとされている敵を捕まえて欲しいという請願の時は二人称複数で書いていると推測する。おそらく、書き手が本当に訴えたい人物は二人のうちのどちらか一人であると考え。サッカラ出土のリネン製のカイロテキストでは、宛名は夫一人であるが、書簡の中で夫の父親も一緒に訴訟を起こすように書かれており、父親の強大な力を必要としたことがあらわされている。このように、この書簡の書き手も、実際に自分たちの境遇を訴えている人物だけではなく、来世での影響力が強いであろう人物にも宛てることで、元凶である死んだ男女からの効果を強めようとしたのではないかと考える。

第2章 パピルス・ナグ＝エル＝デイル N3737

この書簡は、この書簡の出土地はメルルウの墓で、現在はボストンのファインアーツ博物館に所蔵されている。年代は発掘場所から第6王朝と断定されている。材質は縦24センチ横8センチのパピルスで、6行からなっている¹⁵。非常に丁寧な字で書かれている。左ページの余白部分には、受信人の称号と名前が横向きに書かれ、上下反対の向きで送信人の名前が書かれている (Fig. 3, 4)。

転字

- (1) *b3k dd hr nb.f[]f Hni dd*
- (2) *ifnw hñ n sp 3h ifnw (n) nm^cw n.k hr nn irrw dt.k Sni n rdit m33 sw*
- (3) *b3k im m rswt m niwt w^ct hn^c.k (i)sk in is kd.f[dr] sw ds.f(i)sk*
- (4) *n hpr nis hpr r.f n^c n b3k im n dr is p[]w n hprt nb (i)sk n ink is*
- (5) *p3 wdt st[3w] iw ir.n.kw hr-h3t b3k im di hm s3[w ?].f imi(.f?) sbgsw s3wt(y).f(y)?*
- (6) *r tmt.f m33 b3k im r nhñ*
- (6') *rp^c(t) h3ty-^c imy-r hm-ntr Mrrw*

Hni

翻訳

- (1) 召使いは彼の主人に言う。彼の []へニは言う。
- (2)(3) 何百万回もの有益な挨拶の言葉。あなたと一緒にいる唯一の町での夢において、あなたの忠実な召使いにそれ(悪夢)を見させようと、あなたの隷属民セニが行うこれらのことに関して、あなたの信

15 W. K. Simpson, "The Letter to the Dead from the Tomb of Meru(N 3737) at Naga el-Deir," *JEA* 52, 1966, p.40.

奉者の挨拶の言葉。

- (4) 見よ、彼の性格こそが彼自身を追い払っているのだ(彼自身を悪い方向へと向かわせている)。見よ、この召使いの力において彼(セニ)に対して生じる呼びかけが起こることはない。そして、全ての出来事の[]は終わらせることはない。そして、
- (5) 危害を加えたのは私ではない。他の人々はこの召使いの前で上手く過ごしていたのだから。確かに彼の[・・・]保護者を与えよ。
- (6) 彼(セニ)が永遠にこの召使いを気にとめないように、(彼が?)守ろうとする者を傷つけさせませんように。
- (7) 世襲貴族、州候、ヘム神官の監督官、メレルウ
ヘニ

言語注釈

(1) *b3k dd hr nb.f[]f Hni dd*

この行の欠落部分に関して、シンプソン氏は「*mrrw*」としているが、注釈ではもう一つの選択肢として「*s3*」の文字をあげている¹⁶。メレルウの墓の壁画におけるヘニの名前には、「*s3.f*」と「*mry.f*」が書かれており¹⁷、この書簡にもこのどちらかが書かれたのは間違いない。

(2) *i^{nw} h^h n sp 3h i^{nw} (n) nm^w n.k hr nn irrw dt.k Sni n rdit m33 sw*

i^{nw} は「挨拶、叫び」と訳される。ヒウボウル¹⁸の2行目においても同じ表現方法が使われており、同じ訳がされている。

nm^w の文字に関して、シンプソン氏はこの文字を遠慮がちに *m^hnk^w* と訳している¹⁹。*nm^w n.k* 「忠実なる者」として訳すことに対して可能であるとはしているが、この形を採用するのなら、*i^{nw}* と *nm^w* との間に *n* が必要となるため、このフレーズが不自然になってしまうことからこの形を採用していない。著者は、この部分に欠落はなく、明確に文字が読み取れることから、ここは *nm^w* であると考える。*nm^w* の *n* は属格の *n* を兼用していると読む。

hr nn irrw dt.k Sni のフレーズはヒエラティックにおいて、ヒウボウルが同じ表記をしている²⁰。*irrw* は、未完関係形として解釈する。

(3) *b3k im m rswt m niwt w^t hn^c.k (i)sk in is kd.f[dr] sw ds.f(i)sk*

rswt は「夢」と訳される。ここでは決定詞に悪い意味を表すセト神が使われているため、「悪夢」となる。*niwt w^t* は欠落しているため、シンプソン氏の訳に従う²¹。直訳は「唯一の町」である。この「唯一の町」とは、死者の町のことを述べている。

dr の文字の右側が欠落しているため、シンプソン氏の訳に従う。

(4) *n hpr nis hpr r.f n^c n b3k im n dr is p[]w n hprt nb (i)sk n ink is*

16 W. K. Simpson, "The Letter to the Dead from the Tomb of Meru (N 3737) at Nag^c el-Deir," *JEA* 52, 1966, p.42.

17 C. N. Peck, *Some Decorated Tombs of the First Intermediate Period at Naga Ed-Der*, Ph-D(Brown University), 1958, p.117.

18 A. H. Gardiner, and K. Sethe, *Egyptian Letters to the Dead*, London, 1928, p.12.

19 W. K. Simpson, op.cit, pp.42-43.

20 A. H. Gardiner, and K. Sethe, op.cit, p.12.

21 W. K. Simpson, op.cit, p.45.

n dr is の後に欠落部分があり *w* が続いている。シンプソン氏は欠落部分の前に *p* があり、*p[]w* としている。この部分の文字は不明である。

(5) *p3 wdt s[3w] iw ir.n.kw hr-h3t b3k im di hm s3[w ?].f imi (.f?) sbgsw s3wt(y).f(y)*

ir.n.kw の *ir.n* は良い方向で行っていることを指している。

シンプソン氏は *s3[w nb].f* と解釈しているが、欠落部分の空間から、*nb* 以外の文字が入ることができる。欠損部分が不明であるため、*nb* を入れることに疑問を持つ。故に、著者はこの空白部分を読むことを躊躇する。また、接尾代名詞 *.f* はセニを指していると考える。なぜならば、書き手であるヘニが一貫して自分のことを指す時は「この召使い」と表現しているからである。

sbgsw の原形は *sgbs* 「傷つける」である。ここでは、否定補語と考える。

s3wt(y).f(y) に関して、書かれている文字では *s3wt.f* と読むことができる。*t* がついているため、この守護者は女性と認識することができる。前に同じ文字があるが、その後が部分的に欠落している。その部分に *t* があったのかは確かではないが、欠落部分の上部から *t* が書かれているとは考えられない。よって、*t* が女性を表す *t* とは考えられず、ここは *sdmty.fy* 形でとることが妥当であると考えられる。

(6) *r tmt.f m33 b3k im r nhh*

tmt.f に関しては、ガーディナー氏の *Egyptian Grammer* の § 408 を参照。

(7) *rp^c(t) h3ty-^c imy-r hm-ntr Mrrw Hni*

この行の文章は称号と名前の二行で書かれている。メレルウの称号については彼の墓に描かれている²²。

内容解釈

この書簡の書き手はメレルウの息子であるヘニ、読み手はヘニの父親であるメレルウである。ヘニがメレルウの息子であることは、メレルウの墓である N 3737 墓からの壁画から理解できる²³。彼の墓の東壁の中央部分において描かれており、人物の前には *Hni s3.f* 「彼の息子、ヘニ」と名前が描かれ、このことから彼がメレルウの息子であるということがわかる。また、この書簡のもう一人の登場人物であるセニに関しては、東壁の壁画において、ヘニの2人前の人物の前に *Sni* 「セニ」と描かれていることから、同一人物であると考えられる。ヘニよりも人物像の描かれ方が小さいことから彼よりも身分は下の人物であろう。しかし、壁画が欠落していることから、彼がどのような人物であるのかといった詳細は不明である。

書き手のヘニは、自分の見る悪夢(死者の町での悪い出来事または死者の町を夢で見ること)がセニという人物によって行われていると考えていた。何故、セニが悪夢を見せているのかは書かれていないが、おそらく夢の中にヘニが出てきたのか、あるいは、セニとの関係がうまくいっていないために彼が悪夢を見せていると思ったのであろう。ヘニは、自分がセニに対して悪いことを行ったことがないと語り、自分がセニに恨まれる覚えがないことを主張している。それ故に、ヘニは父親に対してセニに保護者を与えるように促し、セニがヘニに対して悪い思いを抱かないように配慮するよう要求している。

死者への書簡の書き手は、元凶となる者の悪事を防ぐことを目的として書かれているが、この書簡では来世で元凶となる者がいない。ただ「彼の()の保護者を与えよ」と述べているだけである。ヘニが元凶として見られているのであろうか。では、ヘニは死者であるのだろうか。ヘニの決定詞には死者の決定詞がないため、彼は生者である可能性が高い。また、セニが生者である理由に関して、他の書簡では

22 C. N. Peck, *Some Decorated Tombs of the First Intermediate Period at Naga Ed-Der*, Ph-D(Brown University), 1958, p.100,106,114, and 115.

23 *Ibid.*, pp.112-13.

元凶となる死者に対しては「捕えろ」や「訴訟を起こせ」という表現を使うが、ここでは「保護者を与えろ」という表現になっている。

来世においての元凶になる人物がいないこと、4行目「彼の性格こそが彼自身を追い払っているのだ。」と6行目「彼(セニ)が永遠にこの召使いを気にとめないように、(彼が?)守ろうとする者を傷つけませんように。」の言葉から、ヘニの考えている元凶はセニではなく、「セニの性格」と考えることは可能である。

この書簡の最後に、書き手であるヘニの名前が逆さまに書かれている(Fig. 3. 4を参照)。これは父親に対して敬意を表している表現の方法であったと考える。

結論

ナグ=エル=デイルから出土した N3500 の書簡は、書き手が自分の家に起こった不幸(子どもの病気と考えられる)を取り除くため、一人ではなく二人の死者に宛てて請願を書くことにより、確実に災いを取り除くことを目的として書かれた書簡である。N 3737 の書簡は、書き手が自身の父に対して自分のことを恨んでいる人物に対して守護者を送り、書き手を恨まないようにすることを願っている。彼は悪夢を見せている元凶を死者によるものではなく、生きている人物の性格によるものとしている。死者への書簡は、来世にいる死者が現世の人に悪い影響を与え、悪事を行わせていると考えており、そのことによって降りかかった不幸を取り除こうとする気持ちから書かれたものであると考えられていた。しかしながら、この N3737 の書簡は生きている人物を元凶としており、他の死者への書簡とは異なった形態を示している。

この二つの書簡の内容を改めて考察することにより、古代エジプト人は病気や悪夢といった、現世に生きる人の力では解決できない事柄に対抗するための手段として、アクとなり力を得たと考えられている死者に協力を要請することで自分に降りかかった不幸な事柄を解決しようと考えていたこと、また、悪事の元凶は必ずしも死者であるとは限らないということが理解できる。より力を持っていると思われる死者が協力して災いを取り去ってくれることを彼らが期待していたことは、リネン製のカイロテキストの書簡において、もう一人の死者を協力させるように記述していることから明らかである。

この資料は、古代エジプト人が持っていた死生観や呪術思想が表れており、実際に彼らの日常生活で使われてきたものである。故にピラミッド・テキストやコフィン・テキストといった形式化されている資料とは少し違った側面を見せている。今後、このようなテキストとの関係について考えてゆく必要がある。

参考文献

- C. N. Peck, *Some Decorated Tombs of the First Intermediate Period at Naga Ed-Der*, Ph-D (Brown University), 1958.
- R. O. Faulkner, *A Concise Dictionary of Middle Egyptian*, Oxford, 1962.
- H. Frankfort, *Kingship and the Gods*, Chicago, 1978.
- A. H. Gardiner, and K. Sethe, *Egyptian Letters to the Dead*, London, 1928.
- H. Goedicke, "The Letter to the Dead, Nag'ed-Deir N 3500," *Journal of Egyptian Archaeology* (以下 *JEA* と略す)58, 1972.
- R. B. Parkinson, *Voices from Ancient Egypt*, London, 1991.
- H. Ranke, *Die Ägyptischen Personennamen*, Vol.1, Glückstadt, 1935.
- W. K. Simpson, "The Letter to the Dead from the Tomb of Meru (N 3737) at Naga el-Deir," *JEA* 52, 1966.
- W. K. Simpson, "A Late Old Kingdom Letter to the Dead from Nag'ed-Deir N 3500," *JEA* 56, 1970.
- R.K. Sharon, *Egyptian Letters to the Dead in Relation to the Old Testament and Other Near Eastern Sources*, Ph-D (New York University), 1989.
- The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt*, Vol.1, Oxford, 2001.
- 石上玄一郎、『エジプトの死者の書』、人文書院、1980年。
- 内田杉彦、「古代エジプトの『死者への書簡』における死者」、『オリエント』第29巻2号、1986年。
- 吹田浩、『中期エジプト語基礎文典』、三省堂、2003年。

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成20年度～平成24年度）」によって行われた。

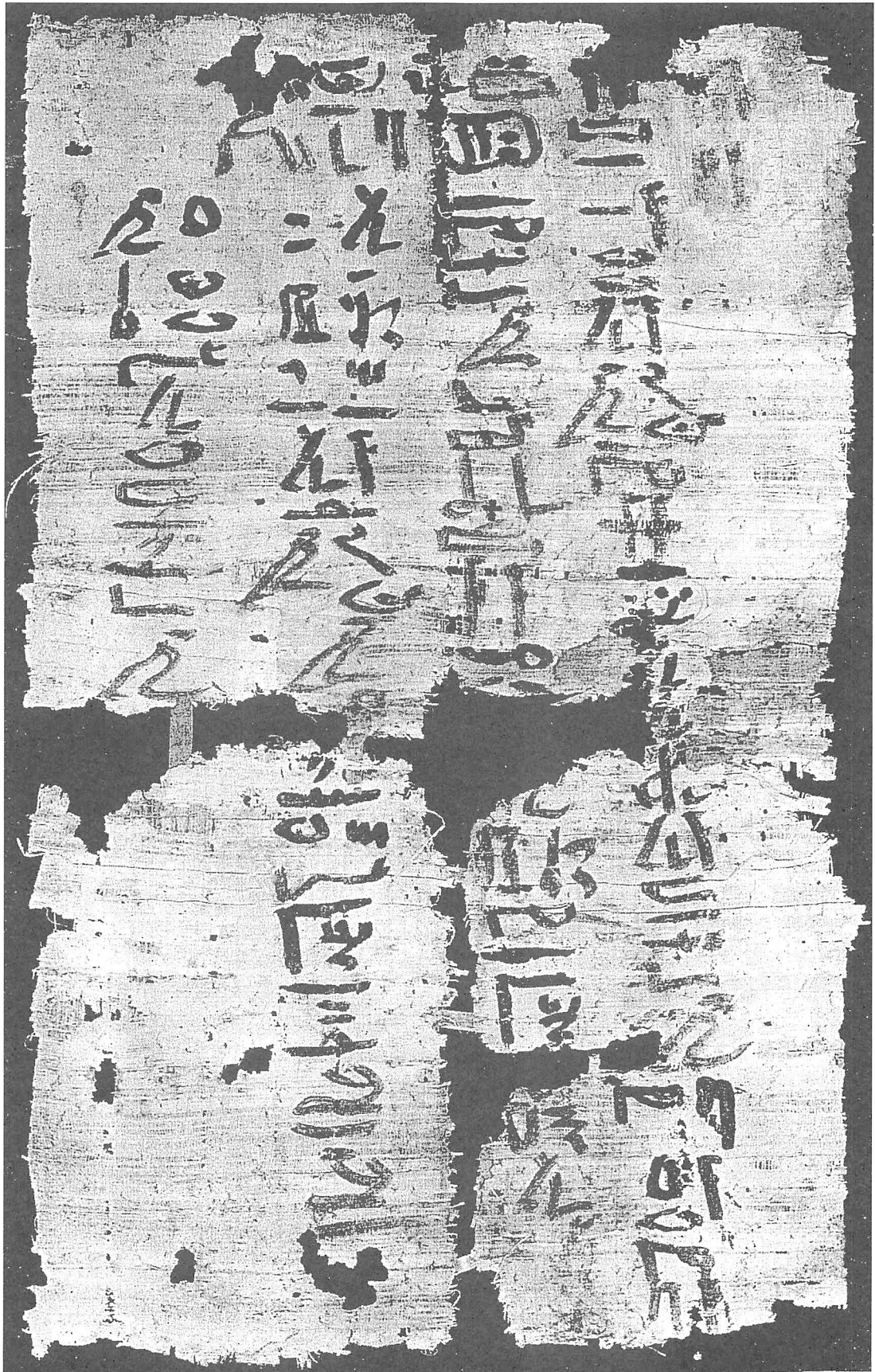


Fig 1 W. K.Simpson, *JEA* 56. pl. XLVI

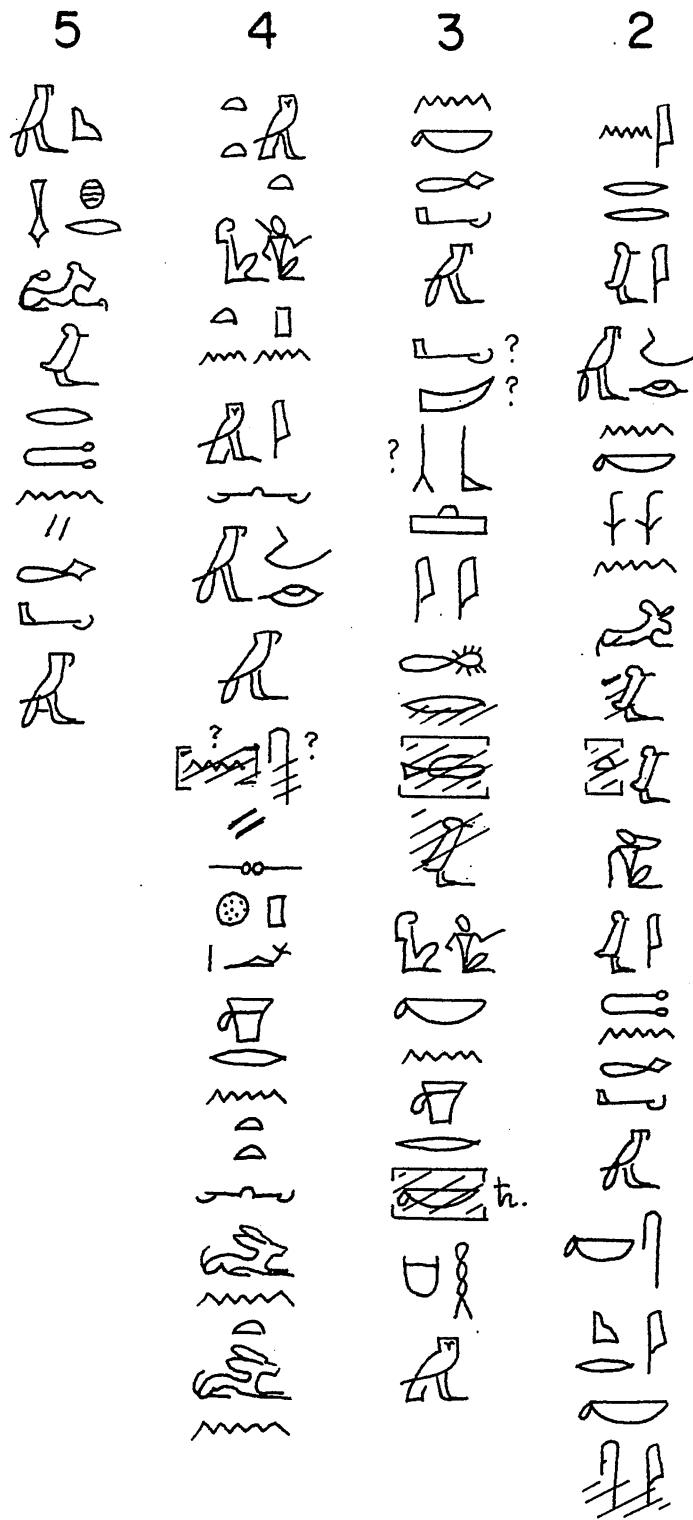
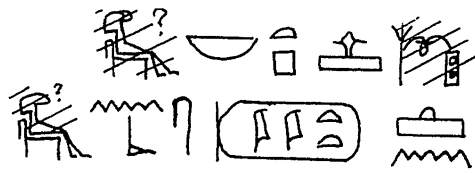


Fig. 2 W. K. Simpson, *JEA* 56, pl. XLVIA

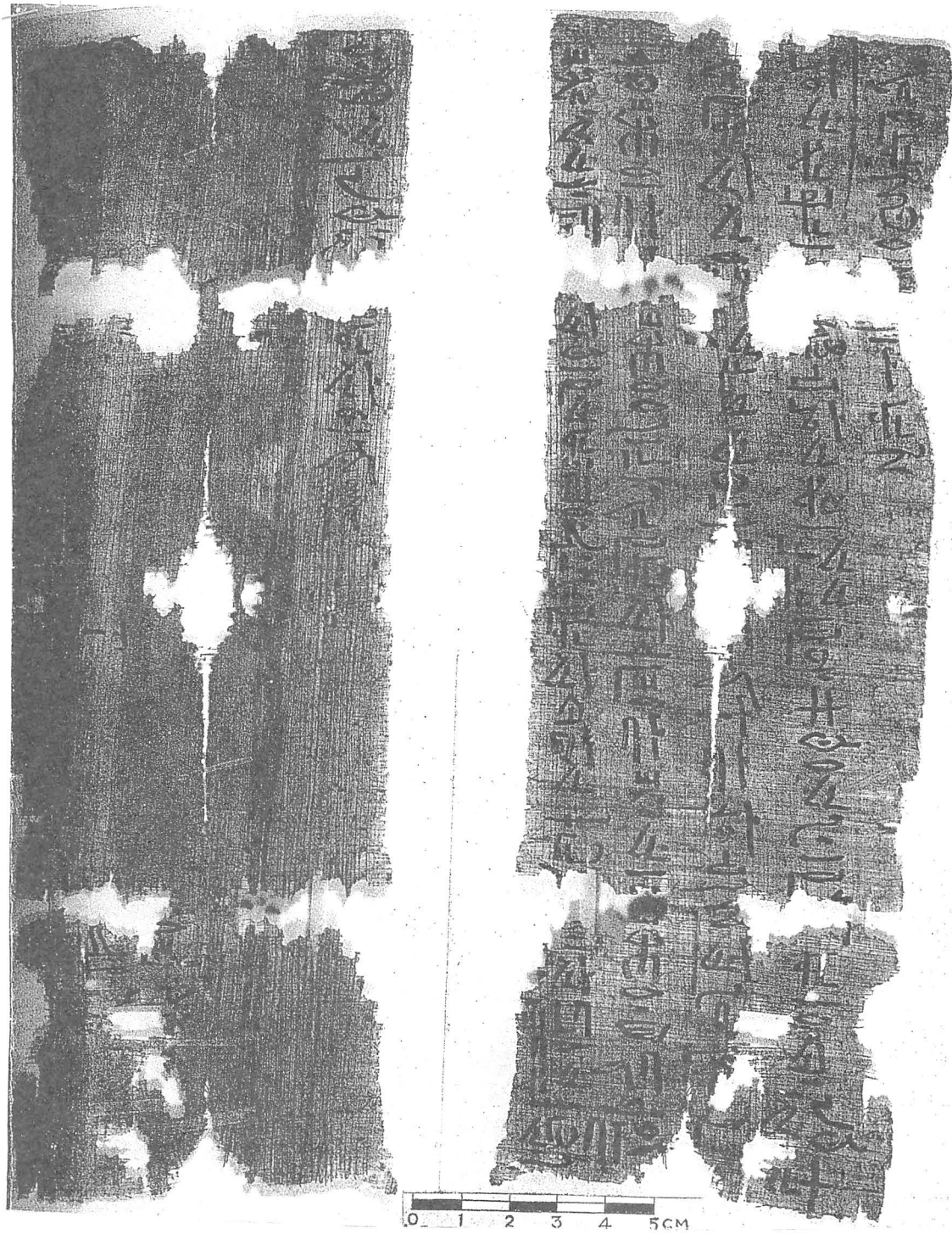


Fig. 3 W. K. Simpson, *JEA* 52. pl.IX

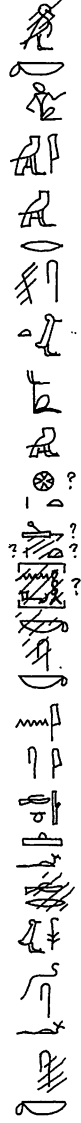
VERSO

RECTO

6


5


4


3


2

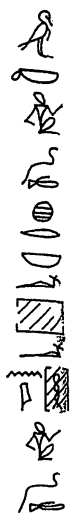
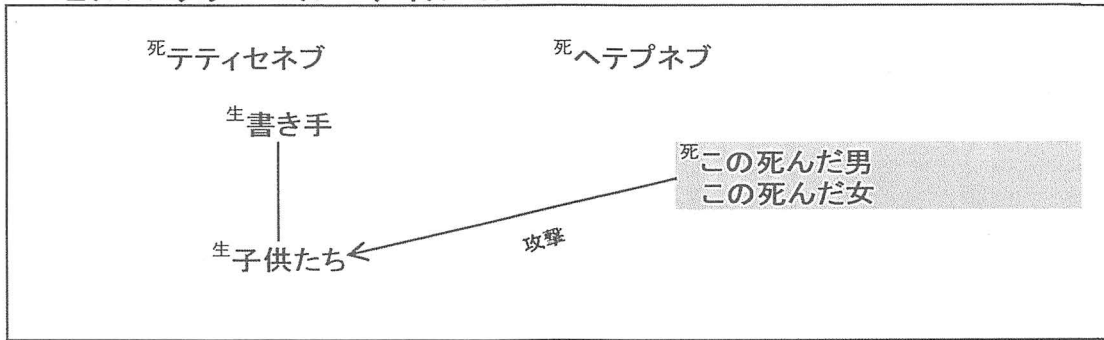

1






Fig. 4 W. K. Simpson, *JEA* 52. pl. IXA

・パピルス・ナグ＝エル＝デイル N3500



・パピルス・ナグ＝エル＝デイル N3737

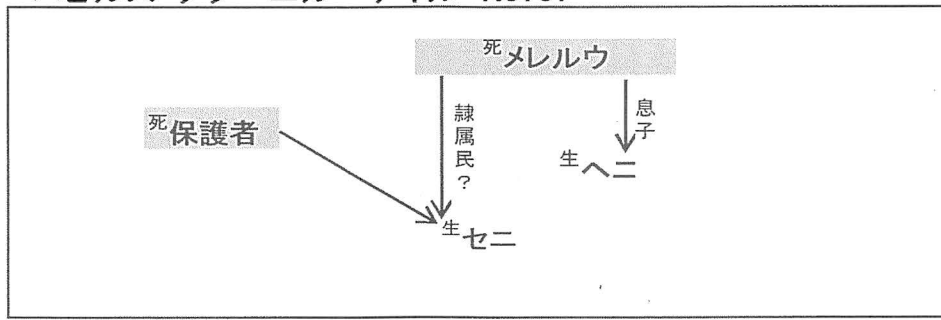


Fig. 5 書簡の人物相関図

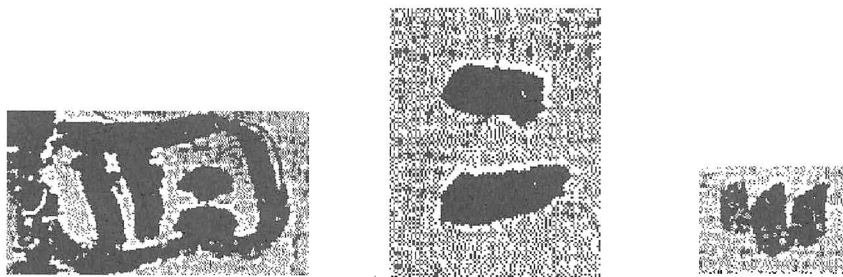


Fig. 6 TとPのヒエラティック文字。右がP、中央がT、左はティセネブの名前である。

(W. K. Simpson, *JEA* 56. pl. XLVI より)